

赤羽由規子講師 “なんてたって おもしろい わらべうた” 講演とワークショップの概要

[概要]

“ゼミ（東京藝術大学民族音楽ゼミナール）は、ある時から小泉先生の発案で、他校の学生や社会人も参加できるように夕方6時に始まりました。おかげで私は、就職、結婚、子育て中も休まず在籍し、気がつけば20年以上も通い詰めることに…”。ゼミ最古参の赤羽講師が、勉学の楽しさを教えてくださった恩師に感謝しつつ、小泉教授の人となり、教授が種をまいた“わらべうた”研究の道のりを振り返りました。

講演後のワークショップでは、多くのレパトリーから、日本本土と沖縄のわらべうたを選び、フロアとともに遊び歌の持つパワーや楽しさを体感しました。

[講演聞き書き]

◆小泉先生のユーモアあふれる人となり

先生は、“何でも遊びにになってしまう人”。口癖は“楽しくない事はやってはいけない”でした。“学問の世界で遊びと勉強を分けるのはとんでもない、これぞと思える楽しいテーマをみつけて研究しなさい”と、我々学生を勇気づけてくれました。

◎エピソード1：調査地の八重山で

翌日台風来襲と聞いた小泉先生は、“今日のうちに泳がねば！”と、学生を連れ、何とランニング姿でバスに乗り海岸へ。純情だった私たち女子学生は仰天しました。

◎エピソード2：柴田南雄氏（東京藝大楽理科の同僚、作曲家）の離任お祝い会で
当時はやった“自衛隊に入ろう”の旋律で、“♪ 楽理科に入ろう、入ろう、入ろう、
楽理科に入ればこの世は天国。♪ 楽理科をやめよう、やめよう、やめよう、楽理科を
やめればこの世は天国！”と替え歌を熱唱。柴田先生は大喜び！！親しい同僚をユーモアたっぷりにお送りしました。

◆わらべうた研究の道のり

1. 小泉先生との本格的な出会い:それは“採譜演習*”から始まった。

柴田教授の指導で現代音楽の卒論を書いた私は、専攻科（藝大大学院開設前の課程）に進学しました。1年目に小泉先生の“英語楽書購読”を取った時、先生は実につまらなそうでしたが、2年目（1961年4月）の“採譜演習”では笑顔全開なので、“別人か？”とびっくり。

授業が始まったとたん、先生から“録音器を持って今からすぐ校門を出て子どもを探し、わらべうたを録音して来なさい”と号令をかけられ、2度びっくり。私の班は運よ

く録音できたものの、子どもと出会えなかった班や、出会えても“わらべうた知らない？”と聞いて“知らない”と言われ、すごすご引き返した班など、惨敗組もありました。

* “採譜”とは、歌や演奏を耳で聞き取り、五線譜で記すこと。

2. “究極の良い録音”にむけて準備開始

やっとの思いで録音したのに、学校に戻って聴き直すと頭や尻尾切れで、使い物にならない物だらけです。そこで、良い録音のやり方やレコーダーの使い方をみんなで討論しました。先生は、私達から少し離れて、教室の片隅で靴下を脱いで胡坐をかき、小さい音でインドの楽器ヴィーナを弾いています。学生の自主性に期待してくれたのでしょう。ときどき要所所で私たちに質問を投げかけ、示唆を与えてくれました。

私達が討論の末に考えた“究極の良い録音”とは、子ども達が調査者の存在も忘れて、遊びに熱中し、心から面白いと思った時の録音なのです。また、歌の速さや声の高さを調査者が誘導するのもご法度です。歌い始めが揃わないこともよくありますが、そういう時もじっと我慢して、調子が出てくるのを待たねばなりません。そうしてこそ、子ども達がわらべうたをうたう本当の姿が見えてくるのです。

10年ほど前、TBSのインターネット博覧会で、子どものわらべうたを掲載する企画に関わりました。ディレクター氏から“撮影隊が着いたらすぐ収録できるように、準備しておいて下さい。”とリクエストがありました。上記の事を話し、それは無理だと納得してもらいました。

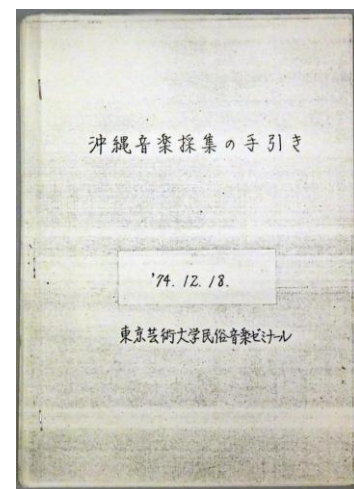
良い録音のマニュアルを作りました。1960年代なかばで、お隣の中国が文化大革命の真っただ中にあった頃。小泉先生は“毛語録”をもじって、マニュアルを“けごろく”と呼びました。本物に倣い赤い表紙を付けようか、といった提案も。このマニュアルは、その後のゼミによる民謡調査手帳（手引き）に受け継がれてゆきます。

毛語録（もうごろく）

それとも“けごろく”？

- ・ 録音方法の改良とマニュアル
- ・ 記録方法の改良とメモ用紙の統一
- ・ 都内23区100校へ採集！の大号令

“毛語録”は、後の採集手帳になった
右は1974年 民俗音楽ゼミナール採集手帳



また、音楽教育家の羽仁協子さんも、子どもの集団遊びに造詣が深く、我々の調査にとっても興味をもって下さいました。

羽仁協子 (はにきょうこ)

- ・ 1929～2015年
- ・ 日本の音楽教育家
- ・ 日本コダーイ協会会長
- ・ “コダーイシステム”をハンガリーで学び帰国



『こどもの集団・遊び・音楽』
コダーイ芸術研究所編
明治図書出版, 1969年

5. わらべうたの分類作りと『わらべうたの研究』の出版

わらべうた調査で夜も日も暮れるうちに、修士論文を書く時期が目前に迫ってきました。現代音楽で卒論を書いた私は、修論で続きをまとめるつもりでしたが、とても間に合いそうにありません。小泉先生に相談したら、「こんなにわらべうたを調査しているのだから、わらべうたの遊びで修士論文を書いて卒業した方がよい。」と助言をいただき、「遊びの形態によるわらべうたの分類」と題する修論を仕上げました。わらべ歌を遊びの形態で分析することで、あそび歌のリズムと身体運動が密接な関係にあることや、遊び道具によっても遊び方が左右されることがわかりました。たとえば、縄跳びは2拍子、まりつきは1拍単位で、固定した拍子は必要ないなど、です。

わらべうたの分類

- ①となえうた ①絵かきうた
- ②おはじき・石けりなど
- ③おてだま・はねつきなど
- ④まりつき ⑤なわとび・ゴムなわ
- ⑥じゃんけん グーチョキパーあそび
- ⑦お手あわせ ⑧からだあそび ⑨鬼あそび

この分類は、共同調査の成果として刊行した『わらべうたの研究』に採用され、この本全体の最初に必要な仕事となったのは、今でも嬉しく誇らしく感じます。

楽譜編と研究編の2冊からなり、楽譜作りは大変な仕事の一つでした。なぜなら、全ての歌い方をもれなく楽譜に拾うため、旋律のヴァリエーションを「比較総譜」として、網羅したからです。

この「比較総譜」は小泉先生のアイデアでした。大多数の子どもがうたう基本旋律だけではなく、数人の子どもがうたうヴァリエーションまで並べてみると、その歌の全体像がはっきりわかります。子ども達は歌のどこを変えるのか、なぜ変えるのか、考える目安ともなるのです。

当時、印刷屋さんで浄書してもらおうのも大変なので、楽譜を自分達で全て手書きで浄書しました。



[備考]：講演では、赤羽講師によるジェスチャー付きお手合せあそび「青山土手から」の実演紹介もありました。

[比較総譜の一例]

6. 小泉ゼミで体験した研究の楽しさ

◆先生と同じ目線にたてる喜び

小泉先生は、『日本伝統音楽の研究1』で、わらべうたの重要性に気づき、本格的な調査を思い立ちました。しかし、実際に多くの子どもがどのように歌い、どのように遊んでいるのか、東京23区の100校の小学生のわらべうた遊びの実体が資料として必要と考えられたのです。我々の発見は先生にとっても発見でした。先生といつも同じ目線で、一緒に様々な発見ができた事が幸せでした。

◆思いがけない歌との再会

自分が調査したわらべうたと、飛び離れた地域で再会するのも、わらべうた研究の楽しみです。

1961年に浅草小学校に向かったとき、毬つきでどの学年も同じような遊びをしている事がわかりました。“飛行機の宙返り”と20回唱え、左右の手ごとに遊び方を少しずつ変えてゆく、という周到なルールでした。あまりに見事な遊び方なので、他の小学校でも流行っているか仲間に確認を頼みましたが、結局、一つも見つかりませんでした。ところが、2年後、ゼミで沖縄へ行った最初の日、那覇の与儀小学校で見つかったのです。しかも、沖縄の有名な“カチャーシー”風の付点リズム。旋律も、浅草が二音だけの節だったのに、三音でとてもメロディアスです。“こんな離れたところに、どうして？”と、大感激しました！！

◆わらべうた調査で自分を再発見

わらべうたの研究調査は、私自身の再発見にも繋がりました。中央区日本橋小伝馬町に生まれ、下町育ちの私は、子供時代、長唄やお三味線のお稽古はしても、ピアノに触れたことはありませんでした。藝大に入学してみると、周りにはピアノのうまい同級生ばかり。非常に疎外感を感じ、密かに苦しむことに。ところが、小泉ゼミでわらべうたに出会い、子供の

ころ友達と歌い遊んだ記憶が一気に蘇ったのです。そのおかげで調査がスムーズに進む手ごたえも感じました。わらべうた研究は、私に居場所を与えてくれたのだと思います。

7. わらべうたとともに歩む

最後に、現在の私の活動をご紹介します。数年前から、私は児童施設“至誠学園”で、子ども達とわらべうた遊びを続けてきました。最近では、年の違う子ども達が大勢で一緒に遊ぶ環境はまずありませんが、ここはまるで昔と一緒に。子供達は、毎週私のクラスを楽しみに待っています。

遊びを通して見出せるのは、今も昔もかわらない子どもの姿勢です。つまり、“今までやったことをそのまま再現したい”という願望と、“ちょっと変えてみたい”という願望を、同時に持つことです。両者がせめぎあい、古いものが少しずつ変わりながら残っていく。“伝統文化”に属する民謡や伝統音楽なども、常にこうした二律背反的な状態にあったのではないのでしょうか。

わらべうたと出会い半世紀以上がたちました。この先も、わらべうたを介した子ども達との付き合いが続きそうです。これほど楽しい体験を続けて来られた事に感謝しつつ、私のお話をおわります。

[備考]

上記講演とワークショップでは、赤羽講師とわらべうた普及に携わる以下の皆様にご協力いただきました。ここにお名前を記し御礼もうしあげます。

(五十音順、敬称略)

相京香代子、岡部新吾、徳世友子、西村美智代、深海馨代、増田きぬ子、丸川徳子、森川玲子、渡辺康則